

10月27日、鎌倉市生涯学習センター主催のコンサートを近くの市役所支所の会議室で聴いた。今回も往復ハガキで応募して当選した無料のリサイタル。最近の僕の感想文は、いつも無料のもの。年金生活者の貧乏ぶりを露呈するようで恥ずかしいが、有名ではなくともプロの演奏家によるコンサートを無料で聴けるのは有難い。今回は同伴者可とあるので連れていった孫娘は、約150名の高齢者ばかりの聴衆の中で、唯一人の子供だった。

催し物は「バッハ Vn シャコンヌ・無伴奏チェロ組曲」が正式な名称。前半がバッハのシャコンヌと、よりポピュラーな曲の合奏、後半がバッハ無伴奏チェロ組曲第三番とよりポピュラーな曲の合奏、という組み合わせ。ヴァイオリンは大貫ともみさん、チェロは渡邊啓子さん。

まず、大貫さんがいきなりバッハの無伴奏パルティータの一曲を4分ほど弾いた。「あれ、でもこれシャコンヌではないな。」と、思ったら、「パルティータ第二番の第1曲アルマンドです」と紹介。

「皆さん、バッハの曲なら、これご存知でしょうか？」と「主よ、人の望みの喜びよ」をサラリと弾いた。「結婚式でよく演奏されますね」とのこと。この曲がポピュラーになったのは、ここ25年頃の間ではなかろうか？40~50年前には結婚式でよく聞いた「バッハ」の曲はメヌエット・ト長調、というより「ラヴァーズ・コンチェルト」の原曲。今ではバッハの作曲ではないことがよく知られている。

[知ったぶり蛇足：以前どこかで僕が書いたことがあり、またか、と思われる方もおられるだろうがお赦しを。バッハの曲は、Jesus bleibt meine Freude(イエスは私の喜びであり続ける)であり、「人の望み」はない。バッハが曲をつけたドイツ人ヤーンの詩の第6節が、バッハの曲のタイトルと同じ。ところが、詩全体のタイトルは Jesu, meiner Seelen Wonne(イエスよ、私の魂の喜びよ)であり、イギリス人ブリッジスが Jesu, Joy of Man's Desiring と訳した。これが、日本でタイトルとして定着した。]



左: 大貫ともみさん

右: 渡邊啓子さん

昔の演奏家は、音楽ができさえすればよかったような気がするが、近頃の女性演奏家は美しく話も上手な人が多い。

お二人とも音楽教室で教鞭をとっておられるためか、お話は、我々素人の老人にも分かり易いように優しく話してくれる。

このあとパルティータ第2番ニ短調第5楽章のシャコンヌ約14分が演奏された。ヴァイオリニストが絶対弾けることを求められる難曲という。名曲をナマで聴けて満足。

[知ったかぶりしたいが、できない蛇足：(1) パルティータ：現代イタリア語では、スポーツの試合が第一義、一組の船荷から派生して一組というのが第二義。これから18世紀ドイツで「組曲」との意味で使われたことはうなずける。ところが17世紀イタリアでは変奏曲の意味だったそうだが、なぜだろうか？(2) シャコンヌ：音楽用語はイタリア語が多いのに、これはフランス語。17世紀にスペインとイタリアから入って来たチャッコーナのフランス語読み。チャッコーナは多分新大陸(ペルー)の舞曲で16世紀末にスペインに入ってきたという。では、新大陸でのチャッコーナの語源は、と思い、調べたが不明。]

大貫さんは、「ライプツィヒに短期留学し、バッハゆかりの聖トーマス教会でオルガン演奏を聴きました。バッハ自筆のブランデンブルグ協奏曲の譜面の写真が絵葉書として売られていたので買いました。」と、その絵葉書が回された。「今では、ピアノを弾いて作曲すれば自動的に譜面が印刷されるけれど、当時は、こんなに大変な手書きの譜面でした。それもバッハは1,100曲も作曲しているのですよ。作った子供も何と20人。」僕も40年ほど前に、ライプツィヒ見本市を訪れたついでに聖トーマス教会でオルガン演奏を聴いたことがある。



このあと、ヴァイオリンとチェロの合奏で3曲続けて、「私のお気に入り」、「枯葉」、「ムーンリバー」。「サウンド・オブ・ミュージック」からの「私のお気に入り」は僕のお気に入りの曲で、ミュージカル・ナンバーだが、ジャズ奏者も好んで演奏する。ロジャース&ハマースタインのミュージカルは、オペレッタの伝統を最もよく受け継いでいるので、今回のようなクラシック的演奏もよく似合う。「枯葉」が歌詞の付いた歌曲としてのオリジナルは、映画「夜の門」の挿入歌ということを知った。

「映画音楽3曲」の次は、渡邊さん自身が編曲した「秋の唱歌メドレー」。終わってから「何曲入っていたか」と聴衆に質問した。6～12曲のそれぞれに挙手があったが、正解は11曲。自信のあった僕は8曲で落胆。「12曲に手を挙げられた方は、私の知らない曲が聞こえたのですね」と渡邊さん。

次は、ミュージカル「オペラ座の怪人」から「think of me」。このミュージカルの「the phantom of the opera」 「the music of the night」 「all I ask of you」 に比べると一般には演奏回数は少ないが、綺麗で甘美な曲で、孫娘も僕も好きな曲。

前半の最後は、カルロス・ガルデル作曲のアルゼンチン・タンゴ「ポル・ウナ・カベサ」(首一つの差)。色々な映画に挿入されたそうで、今回の演奏はジョン・ウィリアムズがオーケストラ用に編曲したものを元にした、という。僕としては初めて聴く曲だった。

15分の休憩の後、後半に移った。

まず、「バッハの無伴奏セロソナタでは、この曲を皆さんはご存知でしょう」ということで、弾かれたの

は第一番の第1楽章プレリュード。聴衆は「聞いたことあるある」とうなずく。「クロイツェルのヴァイオリン教則本」に練習曲として載っているの、耳にする機会が多いと言う。ああ、そうだったな。

さて、バッハの無伴奏チェロソナタ組曲第三番。ハ長調なので、ピアノでいえば白鍵だけで弾けるわけで、チェロで最も演奏しやすい由。ピアノでは黒鍵がある方が弾きやすいという。チェロの最低音が、ハ長調のドの音とのこと。全部で5曲あるが、続けて演奏せず、1曲ずつ解説を挟んで演奏してくれた。無伴奏チェロソナタ組曲は、六番まであり、それぞれ、プレリュードと5つの舞曲から成る。第2楽章アルマンド(ドイツ舞曲)、第3楽章クーラント(フランス舞曲)、第4楽章(南米起源?のスペイン舞曲)、第6楽章ジグ(アイルランドまたはイギリスの舞曲)と決まっており、第5楽章が、第一番～二番ではメヌエット、第三～四番ではブーレ、第五～六番はガヴォット。

「流れのよい」プレリュードの後、「アルマンドは重くゆっくり、クーラントは軽快なので対比のために続けて演奏します。」との説明だったが、アルマンドはゆっくりだが柔らかく、重くはなかった。「最も複雑な」サラバンド。3拍子の舞曲だがアクセントは第2拍にある。軽快なブーレ(フランス語の発音はブレーに近い)は、よく聞く曲で忘れない。長調・短調・長調と変わる。最後のジグは躍動感がある。「バグパイプのような響きが聞こえると思います」と言われたが、その通りだった。渡邊さんは「バッハというと宗教曲という先入観があるかもしれませんが、この曲は人生・現世を感じさせるでしょう?」と言われた。そこまでは分からないが、宗教色が無いことは確か。バッハが仕えたケーテン(地名)の上流階級の娯楽のために作曲されたのだろうが、芸術作品となっている。

あとは、短い曲の合奏。

*サン・サーンスの「白鳥」：チェロが主旋律で、ヴァイオリンが伴奏だ。

*ピアソラの「リベルタンゴ」：これは硬派ヴァイオリニスト石田泰尚の石田組のコンサートで聞いたことがある。ヴァイオリンが躍動的に活躍する。

*ピアソラの「オブリビオン(忘却)」：記憶喪失者が主人公の映画への挿入曲。初めて聴いた。「甘美だが、はかない。」との解説。

*ピアソラの「鮫」：鮫釣りが趣味のピアソラが、鮫の動きを音楽にしたという。「よく弦楽四重奏で引くのですが、二重奏は今日が初めて。一人でいろいろしなければならぬので、チェロの弦を半音下げます。」と言われた。なるほど、不規則な音の展開で、大変な曲だ。

* 最後は、イタリア人モンティ作曲の「チャルダッシュ」：「チャールド」はハンガリー語で居酒屋を意味する。大貫さんは、「なるべく皆さんの近くで演奏したいと思います。」と、会場を歩き回りながらヴァイオリンを弾いた。僕は昔、頻繁に出張したハンガリーのレストランで、ロマ(ジプシー)の楽団の演奏を度々聴いたことを思い出した。

以上

付記：CDかYouTubeでバッハを聴くのなら、お薦めは：

無伴奏ヴァイオリンのためのソナタとパルティータ全曲：ギドン・クレーメル

無伴奏チェロ組曲全曲：パブロ・カザルス

